

2008.10
Vol.25

発行 / 大橋川コミュニティセンター

「大橋川改修技術検討懇談会」



- 懇談会の様子 -

大橋川通信

大橋川改修情報紙

大橋川改修技術検討懇談会

「大橋川改修技術検討懇談会」は、出雲川事務所が検討する大橋川改修事業に係る段階的な治水対策についての技術的な検討に対して助言をいただくために設立し、河川・橋梁等の専門家により、「大橋川改修の進め方」及び「松江大橋の取り扱い」についてご議論していただきました。

主な助言として、大橋川改修の整備手順については「上下流狭窄部の拡幅・築堤→築堤→掘削」、松江大橋の取り扱いについては、治水上は、昭和47年洪水の規模であれば、当面存置することも可能であるが、道路管理上は、安全性、存置する場合の当面の対策、将来架け替え時の課題や負担などの課題があることから、「様々な観点から別途詳細な検討が必要」というご意見をいただきました。

開催概要

- 第1回 平成20年6月13日(金)
14:00~17:00
・大橋川改修の今後の進め方
- 第2回 平成20年7月18日(金)
9:30~11:30
・大橋川の整備の進め方
・堤防・橋梁等構造の検討
- 第3回 平成20年9月22日(月)
14:00~16:00
・橋梁の検討
・大橋川改修技術検討懇談会のまとめ

委員紹介

(敬称略・氏名五十音順)

浅田 純作

松江工業高等専門学校 環境・建設工学科 准教授(災害社会学)

大屋 誠

松江工業高等専門学校 環境・建設工学科 准教授(橋梁工学)

河原 能久

広島大学大学院 工学研究科 社会環境システム専攻 教授(水工学)

西垣 誠

岡山大学大学院 環境学研究所 教授(地盤工学)

福岡 捷二

中央大学研究開発機構 教授(河川工学) **座長**

「大橋川改修の進め方」と「松江大橋の検討」についての見解

大橋川改修の進め方について



【大橋川改修の必要性】

大橋川沿川は、地盤の低い地域が広範囲におよんでいるため、松江市街地では昭和47年に約20,000戸、平成18年に約1,400戸が浸水被害を受けています。
 今後、ダムや放水路が完成した場合でも、昭和47年実績規模の洪水が発生すると、松江市街地では大規模な浸水の恐れがあるため、早急到大橋川を改修する必要があります。

大橋川の洪水特性

- 大橋川は断面が小さい上に勾配が緩いため、大橋川の水はけが悪く穴道湖の水位が上昇しやすい。また、水位の高い状態が長時間におよぶ。



S47
約2万戸浸水

過去の浸水被害

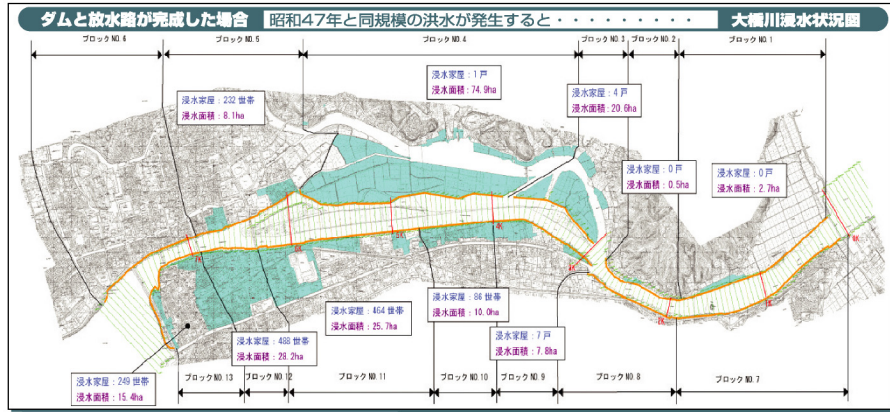
- 昭和47年洪水では、穴道湖沿岸の松江市・平田市・斐川町等を中心に大きな被害が発生し、穴道湖周辺で約25,000戸、そのうち松江市街地で約20,000戸が浸水した。
- 平成18年洪水では、大橋川からの溢水、排水管による大橋川からの逆流、内水氾濫などの要因により、松江市街地で約1,400戸が浸水した。



H18
約1400戸浸水

水害対策の現状

- 大橋川沿川は、洪水時の水位（計画高水位）より地盤が低い地域が広範囲におよび、依然、堤防はほとんどなく洪水に対して無防備になっている。
- 松江市街地の内水対策（排水機場や雨水対策など）は、大橋川における外水対策が未実施のため、その効果が発揮されにくく、整備率も17%と大きく遅れている。
- 斐川水系の河川整備は、上流部のダム、放水路をはじめ、築堤や湖岸堤の整備など着実に進めてきているが、大橋川については整備が大きく遅れている。
- ダムと放水路が完成した場合でも、昭和47年実績規模の洪水が発生すると、水位が現況地盤高を越え、浸水の恐れがある。



【大橋川改修に関する主な助言】

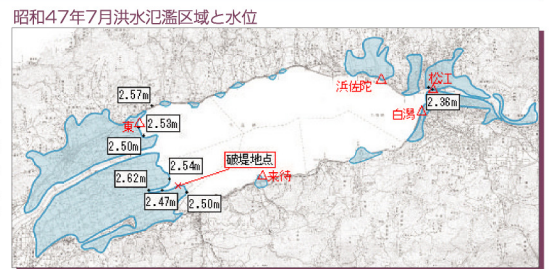
- 大橋川改修については、最終目標（1/150規模の洪水）ではなく、これから20～30年後までのロードマップである「河川整備計画」に向けた議論を行う必要がある。
- 穴道湖の計画高水位H.P.+2.5mは昭和47年7月の大災害により氾濫した時の水位であり、治水事業の根幹である再度災害防止の観点から計画されたものであることから、動かしがたいものである。
- 大橋川改修の進め方については、「上下流狭窄部の拡幅・築堤」→「築堤」→「河道掘削」。

①河川整備計画の策定

- 河川整備基本方針レベルの議論をするのではなく、まちづくりとの調整の中で20～30年後までのロードマップである河川整備計画に向けた説明・議論を行うことが必要である。

②斐伊川の治水対策について

- 穴道湖の計画高水位H.P.+2.5mは、昭和47年7月の大災害により氾濫した時の水位であり、治水事業の根幹である再度災害防止の観点からこの水位が計画されている。昭和三十五年以降、この水位を基準として大橋川の上下流まで湖岸堤も含めて様々な事業が実施されてきており、今後も、重要な施設・社会基盤整備・まちづくりを展開していくための基準となる高さであり、動かし難いものである。



③堤防の構造について

- 計画高水位は将来に向けて、全ての河川整備の重要な基準であり、計画断面が完成した際には、計画洪水発生時の水位が計画高水位以下となる。しかし、改修の途上では、計画洪水より小さい洪水でも容易に計画高水位を越えてしまい、危険な状態になる。したがって、少なくとも計画高水位の高さまでを、信頼性が高く維持管理が容易な土堤で整備することは必要最低限の対応である。

④大橋川改修の進め方について

- 大橋川における整備の進め方

- 1) 上下流の狭窄部の拡幅・築堤を行い、平面形状を確定する
 - まちづくり計画など地域への影響が大きい上下流の狭窄部の平面形状を確定する。
 - 上下流の狭窄部の拡幅は、洪水時の水位低減効果が大い。
- 2) 築堤により家屋の浸水被害を防ぐ
- 3) 河道掘削により水位の低減を図る - 自然環境や漁業に与える影響に配慮しながら、慎重に進める。



【松江大橋の検討】

現在の第17代松江大橋は、治水上の観点から、洪水を安全に流す河の断面積が不足していること、橋の耐震性など現行の基準を満たす安全性も確保されていないことから架け替えが計画されています。また、竣工から70年以上経過しており、損傷・亀裂・欠損などが見つかっています。

しかし、地域の方々から、松江大橋の存置や架け替えについて様々な意見をお寄せいただいていることから、大橋川改修技術検討懇談会において、存置や架け替えに関する課題の整理を行いました。

昭和47年洪水の規模であれば、治水上は当面存置することも可能ですが、道路管理上は安全性や存置する場合の当面の対策、将来架け替え時の課題や負担などの課題があるため、今後、様々な観点から別途詳細な検討が必要となります。

現状と課題

- 現在の松江大橋は、橋脚間隔が狭く桁下が不足し、河の断面積が確保されていない。また、現行の耐震基準などを満たす安全性も確保されていない。
- 松江大橋は残してほしい、工事による周辺への影響が心配、安全でない橋は架け替えが必要、架け替えて観光資源として活用など、地域住民の様々な意見がある。
- 最終目標である河川整備基本方針の計画レベルを満足するために、いずれ架け替えが必要である。

現在の松江大橋の全景写真



現在の松江大橋の状況（老朽化）



継ぎ目の腐食状況

今後の対応

① 治水上の対応

治水上は、戦後最大である昭和47年洪水の規模であれば、当面存置する案でも、架け替える案でも、対応することが可能である。

② 道路管理上の課題

安全性の確保、将来の架け替え時期、存置する場合の当面の対策および将来架け替え時の課題や負担、施工性、景観、周辺への影響などについて、様々な観点から、詳細な検討が必要である。

【対応方針】

松江大橋の取り扱いについては、存置・架け替え、関連するまちづくり・景観、道路管理上などの課題が多く、様々な観点から別途詳細な検討が必要。



大橋川コミュニティセンター

【開館日】年中無休（年末年始を除く）【開館時間】9:30～16:00【駐車場】5台程度
〒690-0841 松江市向島町134-4
TEL(0852)28-3621・3622 FAX(0852)28-3623

E-mail: comisen@mable.ne.jp
ホームページ: <http://www.mable.ne.jp/~comisen>

